

ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

第44号

執筆者

@短信



畑中美穂 新連載

マガジンの存在は以前から気になっていた。そこに昨年12月、京都芸術大学での団士郎さんのご講演を拝聴。「50年続けてきたこと」のお話と、マガジンにも触れられた。日を経ずしてサトウタツヤ先生から「常時執筆募集！」のお知らせ…。「よし、私も50年、続くものを(!?)」とその一つにマガジンへの投稿を決めた。ところがどうにも筆が進まない。連載ということは、初回の原稿はとて重要に思う。連載のイメージや、書き手の私はどういう人物であるかということ、全体の雰囲気やトーン、方向性などを意識せざるを得ずどうもスタイルが定まらない。

と、ある日。それまでの苦悶がうそのようにすると書けた。土台となる原稿があったからということでもないと思う。その時の、「これ」という感じにしっかりと沿うもの

であるように思われた。この印象で今後も連載が続くかはわからない。しかし、1回1回、その時どきの自分の感じに馴染む文章を丁寧に綴っていけば、そのうちに“何か”、色らしいものがみえてくるのではないか。“50年の、はじめの一步”。未来を描くこともゆるやかに、自由に。書くことを続けること、そのようになりますようにと願う。お仲間に入れていただいでうれしく存じます。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

一語一絵
p335~

米津達也 新連載

コロナ禍やまぬ3月1日、朝刊紙面は3.11から間もなく10年を報じているが、心地よい小春日和の町を行けば、今日は県内公立高校の卒業式だそうだ。

コロナ禍でも、多くの18歳が新たな社会に出て行くと思うと、なんだかとても羨ましく思う。

後悔のある無しに関わらず、18歳に戻れたらチャレンジしたかった事は沢山ある気がするが、60になったら、40代でやっとならば良かったと同じように思うだろうから、やれる事は今やっておくことだ、そう思って慣れない執筆作業に掛かりました。

映画監督になりたかったケアマネージャーが、出会った人生の諸先輩方の生き方や物語について描きます。どうぞ宜しくお願いします。

川下の風景
p332~

高井裕二 新連載

今号から連載をさせていただき運びとなりました。生まれも育ちも大阪府。現在は、福祉系大学で助教として勤務しながら、福祉コースのある高等専修学校で非常勤講師もしています。

日光アレルギーで日に当たることのできないために一年中長袖を着ています。色白で、かつ目の色素も薄いためにハーフと思われることが多く、高等専修学校の生徒からは「ウェイツ」とあだ名を付けられています。

生徒からいじられている体験も含め、福祉教育に携わる中で日々感じていることを言葉にしていこうと思っています。これ

からよろしく願います。

福祉教育への挑戦
P338~

本間 毅

先の第43号の中で、私は高名な「河合隼雄」先生のご尊名を「河合隼男」と誤変換していました。不快な思いをさせてしまい、河合先生のご親族ならびにユング派の研究者ご一同様には深くお詫び申し上げます。改めて我が身のそそっかしさを反省しつつも、敢えてお叱りさえなさらぬ皆様の寛容さに心より感謝する次第です。これはフロイトの言う「錯誤行為」などではなく、私の単純な不注意です。

対人援助学会での私の発表は、2015年秋の第7回大会まで遡ります。その後の年次大会や定期研究会で中村正理事長は、私を「医師というより、実存的な発言をする人」と皆さまへ紹介して下さいになりました。人が「実存的に発言する」とは、「自他の個別性およびその可能性(本質からの揺れ幅)を尊重し敷衍する」、平たく言えば「個々の事例から覗える課題を、過去の報告と照らし普遍的な議論に昇華する」と理解すれば良いのでしょうか。この中村正理事長のお言葉に対しては、近日中に遠見書房から刊行予定の拙著『患者と医療者の退院支援実践ノート』において、私なりに回答することができるものと考えております。

次回の第45号からは、上皿天秤と板状分銅を駆使した「いにしへの薬剤師」のように、私が日々、退院支援研究と均衡を保ち続けてきたリハビリテーション医療の現場についてお伝えする予定です。

そして今回は第43号の続編というか、これから始める連載の番外編として第12回大会の企画シンポジウム①と第43号で検討した、「乳児期の髄膜炎の合併症である水頭症に対し複数回の手術を受けたが障害は重くなり、コロナ禍の少し前に50年余りの生涯を終えた男性患者Mさんと、そのお母さん」の関係を理解する手立てとして、仏教的な説話を題材にした『阿闍世コンプレックス』について述べていただきます。

「阿闍世コンプレックス」再考
P320~

河野暁子

この冬は何度も水道管が凍り、何度も雪かきをしました。例年よりも寒さが厳しいと感じていたところに、大きな地震がありました。いつ災害が起きても対応できるよう準備はしているのですが、家が崩れるのではないかと、津波が来るのではないかととても怖かったです。

別の日、この時期にしか取れない早摘みワカメを大量にいただきました。このワカメは柔らかくて、さっと湯がいてポン酢で食べると最高です。時に災いをもたらす海は、美味しい恵みももたらしてくれます。もうすぐ3月11日が巡ってきますね。

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動～

P330～

土元 哲平

新型コロナの影響で、年始のオートエスノグラフィーとナラティブについてのシンポジウム ("International Symposium on Autoethnography and Narrative; ISAN") をはじめ、ほとんどの国際学会・研究会が ZOOM やオンラインでの開催になりました。対面でのライブ感が感じられないのは残念ではありますが、学会・研究会へ参加するフットワークは、とても軽くなったと感じています。これを機に、これまで参加できなかった分野の研究会にも積極的に参加するようにしたいと感じている今日この頃です。

キャリアと文化の心理学

P261～

安發明子

2月中旬、音声 SNS アプリ Clubhouse の児童養護施設についてのルームでは夜22時に214人も集い、施設について話し合われていた。施設出身で現在施設職員をしている人たち、そして YouTube でも当事者たちの活動は活発だ。

フランスも近年は特に当事者たちの活動が政治を動かしている。2019年1月にテレビで討論した施設出身の若者は翌日マクロン大統領夫人から携帯電話に連絡を受け、10日後には児童保護国家委員会が発足、彼も委員会のメンバーに任命された。児童保護副大臣が新たに置かれ、即全国調査を指示、同年のうちに328ページに及ぶ報告書が公開さ

れた。委員会は政府に児童保護に関する国家政策を提言し、問題について意見をまとめ、実施の動向を調査判断し、政策がそれぞれの地域で一貫性をもって実施されていることを保障することが課されている。同年から児童保護分野に100億円追加予算が割かれ、全体では1兆円の予算となっている。児童保護国家戦略も出され、そのサブタイトルは「全ての子どもに同じチャンスと権利を保障する」であり、冒頭には「子どもたちの well-being は国が守る」と書かれている。担当副大臣ができたことで、児童保護分野のニュースが流れる度副大臣がツイッターで反応するなど臨機応変な対応がされるようになり、全国から陳情や当事者の声も集まるようになった。最近ではコロナによる影響がある間は年齢や契約がすぎても子どもを施設や里親宅から退所させず支援を継続させるという指示を出したり、大学以上の進路を選択した退所者には月7万円の生活費と学生寮が優先して与えられ学費は免除になることを決定したり、状況は改善しつつある。これまで国が方針を決めても実施は県に任されていたのが、国が指揮を取り直そうとしている状況である。



(写真は施設出身者と児童保護副大臣のテレビ討論 2021/01/27FranceTV より)

フランスのソーシャルワーク

P264～

玉村 文

産育休を経て職場復帰をして初めての年度末を迎えています。子育てと仕事との両立をしながら、なんとかやってこられたなというホッとする気持ちと、出産前のように働けなかったなという自己不全感をもちながら、この4月からまた産休に入ります。出生率がまた減少しそうな今年、コロナ禍での妊娠・出産について今号と次号でレポートしたいと思っています。

応援 母ちゃん！(1)

P253～

川畑 隆

ふとテレビをつけると、ある島のお医者さんが、「この島には医者僕1人しかいないので(病気やワクチンをうつときには)僕にとっては無医村」と言っていたのが面白くて、クスッと笑いました。でも今はこういう話題で笑っちゃいけないのかなと、

部屋に1人なのに自粛してしまいました。

橋本聖子さんが新会長になって、自民党を離党するというニュースが続けてやっています。「しっかりと…」「しっかりと…」、橋本さんだけではありませんが、他に使う言葉はありませんかね。スケートやって自転車もやって、子どもが6人、大臣やって会長もやって、凄いエネルギーです、56歳。

退職とコロナで社交性が落ちています。4月からまた毎週行くところができますから、酒好性…じゃなくて社交性を磨きましようか、66歳。

「かけだ詩 ④」

p244～

天川 浩

最近、自分がよくいっていたファミレスが閉店した。500円も持っていたら、軽食とドリンクバーを頂けたが、やはり採算が取れていなかったのだろう。コロナで客足が遠のいたのも影響があっただろう。安価で商品を提供するチェーン店ならではの苦悩がそこにはあったのかと思うと複雑な思いになる。友人との待ち合わせ、深夜に食事したり、私には、思い出深い場所だっただけに残念です。これからも店舗運営に厳しい時代になるのでしょうか？人生の1ページになってくれたあのファミレスにお疲れさま、と言いたいです。

ブルーグレーの肖像

P249～

篠原ユキオ

冬眠状態でいたカメが水槽の水面からにゅっと頭を出しているのに気がついた。近づくと慌てて首を引っ込めた。お腹も空いているのではとカメのエサを少量水面に落としてやったが、じっと眺めているだけである。まだ目が覚めたばかりでうつらうつらの状態なのだろう。こいつは娘たちが小さい時に縁日で買ってきたもので、もう何十年もウチに居る。一昨年の春に猫たちが近所に住む次女の新居に引き取られていってからはこいつが唯一の同居人となった。夏場は朝夕の餌やりの時に言葉を掛けるのだが冬場は半冬眠状態になりコミュニケーションは無くなっていった。テレビでは今日大阪に春一番が吹いたと言うニュース。ボクはこいつの目覚めで近づ

く春を感じている。



HITOKOMART
p2571~

原田 希

昨年6月から牧場スタッフになった25歳の女性。単身千葉から、酪農に強い関心を持って来てくれました。2月に初帰省できたらいいな、と言っていたけど緊急事態宣言で叶わず。ないないづくしの残念な空気を入れかえたく、オホーツク海へ流氷船に乗りに行きました。デッキに上がると白銀の大海原、シベリアからの潮風。オオワシにアザラシ！スタッフちゃんのマスクの下にビッグスマイルが見えました。朝4時から仕事をしたのち、往復4時間かけて網走へ。3時間滞在してすぐ帰宅。16時からの夕方の搾乳に滑りこみセーフ！という超ハードスケジュールでしたが、仕事と遊びを意地でも両立する酪農家精神をバッチリ体験させられました。家族も友達もない土地で一所懸命自分の居場所を作ろうとしている彼女に、昔の自分を見るようで。これからもいろんな角度からエールを送りたいです。



左端がスタッフちゃん♪

原田牧場 Note
p237~

工藤 芳幸

先日、第23回言語聴覚士国家試験が終わりました。養成校教員として学生さん

たちの国試受験勉強をサポートしてきましたが、まるで個別指導塾の講師のようなもの。国家試験でかなり心身を消耗するようで、毎年のように体調を崩すことばかりでしたが、今年は今日までのところ無事です。毎年少しずつですが、国試対策ができる範囲を拡大中。国試対策のために日本語学の本を書きました。ここ2か月、メール返信が滞ることばかりでした。

もうすぐ東日本大震災から10年。そろそろ地元の宮城に帰って地元の友人と飲みにも行きたいものですが、今は大阪を出ることも宮城に入ることも簡単ではありません。3月11日をどのように迎えるかとぼんやり考えるところです。

そして、目下、不登校中の次女。ごくまれには登校しています。担任の先生がいろいろとやったださって、宿題プリントをポストに投函してくれることもあります。次女曰く、「学校が爆発すればいいのに」という思いがある子は結構いるのだそうです。だからオンライン授業が望ましいと言います。ただ、オンラインが手放して良いとも思いません。テクノロジーで解決できそうなこともあることは承知していますし、解決できそうなところはどんどん解決すればよいと思います。より一層、ICT化が進むことで、オンライン特有の問題も出てくるかも知れません。もうすぐ中3になるので、今後どんな進路の可能性があるのか自分で調べているようですが、私も時々ネットで情報収集しています。

みちくさ言語療法
P240~

高名祐美

3月末で今の職場を退職する。大学卒業後に就職し、38年間働いてきた職場である。仕事をやめるというのが人生初体験。総務課から退職手続きの説明をうけながら、いろいろ面倒だと感じている。一番は健康保険である。「3月31日にICカードと保険証を返却してください」と言われた。なんだか寂しかった。続けて「健康保険については、任意継続をとるか国民健康保険に加入するかです。市の保険課窓口で自分の保険料を尋ねてください。任意継続の保険料については給与明細で短期・介護保険料を足して2をかけてください。その金額と国民健康保険の保険料

を比較して安い方を選んで手続きをしてもらったらいいです。」と説明を受けた。自分が患者さんに良く説明をしていたパターンである。自分が説明を受ける側になっていることが新鮮だった。私はわかりやすく患者さんに説明できていたのだろうか。ふと思った。

退職に関して次に思うことは、定期収入がなくなることである。年金が支給されるまでにはまだ期間がある。これまでかなり自由に生活してきた。その生活パターンを改めていかなさと思うが、思うばかりで、多分実践できない。まずは好きなだけ本を買っていた習慣を改めようとは思っている。しかし本は読みたいので、これからは図書館を利用しようと考えている。などと思っはいるが、長年続けてきた生活習慣はそう簡単に改められないと感じる今日この頃。

MSWという仕事
P232~

岡田隆介

自分の臨床は、これまでにいろんな機会に学んだことの寄木細工だと思う。相当な年月を経た寄木であるから、崩れるのは時間の問題だ。そんなわけで、これを機に自分流の寄せ木の組み合わせグセを眺めてみることにした。備忘録である。

かつてステージにマイクを置いて去っていった歌い手がいたが、それをまねて自分も相棒マックをスリープさせる準備にとりかかる(シャットダウンではない潔さ!)。ちょうどネタも尽きかけていることだし。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P45~

小池英梨子

穴が空いたり裾がボロボロになってた気に入りのズボンたち。捨てたくないけど、履けないよなーと思ってたら、知り合いの猫ボランティアさんが治してくれました。めっちゃ可愛くなって最高に嬉しいです!!!好きな物を長く使えるのは幸せですね。

そうだ、猫に聞いてみよう
P163~



一宮 茂子

【他者とのつながり】

私は京都市内ならば常に自家用車が徒歩で移動しています。あるとき同好会で知り合った80歳代のお母さんと一緒に買い物に出かける機会がありました。その日は小春日和であったため、車に同乗してもらって嵐山まで遠出しました。彼女には息子や娘がいますが、結婚して独立して子どもはいないそうです。さらに半年前に夫に先立たれて、ひとり暮らしです。足が少し不自由なため、私が杖代わりになって片腕を組んで河川敷を散歩しました。近くの食堂でお昼ご飯も一緒にいただきました。この間の私は亡くなった母を思い出していたのです。生きていればこうして一緒に腕を組んで歩くことが出来ただろうと。後日彼女から聞いたお礼の言葉で印象深かったのは「息子や娘にこんなことをしてもらったことがない」、腕を組んで「一緒にズンズン歩いたことが一番よかった」と。さらに、このような経験を知人にも話したようで「自分はやらやましがられている」そうです。ひとり暮らしで寂しい思いをしている彼女は、他者との密接な触れあいと交流を求めているのだと思いました。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P209～

松岡 園子

夫が長く勤めた会社を退職することになり、少なくとも今年の秋ごろまでは家でゆっくりすること。ゆっくりと休養のできる時間を過ごしてもらえれば良いと思います。

今、目まぐるしい環境変化が起きていますが、楽しみながら進んでいこうと思います。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども(番外編)
P206～

杉江 太朗

児童福祉の現場で働く杉江と言います。職場には車で通勤しています。時間を調整するために、一般道からサービスエリアを利用できるようにと設置されている駐車場で一服しています。その駐車場を利用している方々は作業着姿で、サービスエリアの利用ではなく、そこを集合場所にして、1つの車で乗り合って現場に行かれるという、いわゆる工事関係者が多かったようです。そのため、停車しようと思っても、皆が早朝から晩まで車を停めているため、空きスペースがないことも多々ありました。しかし、最近は、そのような車両が減っており、いつでも車を停めることが出来ます。何か取り締まりをしたような形跡はなく、同じように個々が車で来て、乗り合わせて行かれる方もいるのですが、明らかにその数が減っています。皆のマナーが良くなったのでしょうか。それとも他に便利な場所が出来たのでしょうか。いやいや、そんなはずはありません。利用する目的がなくなったと考えるのが自然です。それは仕事が減ったことを意味します。社会は歯車のようなもので、様々な影響を受けて流動的に動いています。どんなことが作用して利用者が減ったのかは、想像するしかありません。少なくとも皆がテレワークになったわけではないだろうなとか考えながら利用する毎日です。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P202～

迫 共

保育者養成校の教員をしており、今年

も保育実習が始まりました。コロナ対応をしながら60名ほどが保育所・こども園・児童福祉施設に行っています。大学はオンラインでも保育現場は対面が中心ですから、実習指導も対面で行いたいところですが、勤務校は12月以降、完全オンラインになりました。模擬保育も充分できない状況に。

学生に求めたのは、手遊びと絵本読み聞かせをスマホで自撮りして学内サイト(teams)にあげ、相互評価をするというもの。ただ、何度も同じことはできません。四苦八苦しながら事前指導を終えました。今年度の学生が「コロナ世代」と(「ゆとり世代」のように)揶揄されないために、頑張って指導したつもりではありますが、はてさて。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P198～

朴 希沙(Kisa Paku)

12月末に、この間対人援助学マガジンでも連載を続けてきましたマイクロアグレッションについて、初の翻訳本を出版しました(『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書店より)。



この本の出版を機にマイクロアグレッションについて紹介したり取材を受ける機会も少しいただくのですが、そのたびに色々と考えさせられます。今まで言葉にならなかった”もやもや”に名前がつき、研究が積み重ねられていることを知るのはエン

パワーメントになると思いますし、何より無自覚に誰かを踏みつけていたのでは？と自分の日常をはっと振り返る機会にもなると思います。しかし一方で、これだけでいいのだろうかとも思います。差別やマイクロアグレッションの実態を明らかにしたりその影響を知ったりすることからもう一歩進んで、そのような環境の中でも力強く生きている、周囲との関係を紡いできているマイノリティの日常を元気づけられるような、そんな研究もできたらいいなと…そんな希望を胸に、4月から子どもが保育園に入り新年度を迎えるにあたって、新たな気持ちで研究や活動に取り組んでいきたいと思っています。

マイクロアグレッションと私たち 休載

浅田 英輔

clubhouse が意外と面白い。毎晩、いろんなルームを聞き、時にはしゃべるほうに参加したり。Twitter で広がったものが、さらに広がる感じ。心理って、凝り固まった人が多いかと思ったら、そうでもない。いろいろなことにチャレンジしてる人がたくさんいる。声、しゃべりかたの好みがあることを再確認した。ネットの世界はまだまだ広いもんだなあ。

臨床のきれはし P104~

三浦 恵子

東日本大震災から10年という記事や報道が多くなされる時期になった。この10年という期間の捉え方は千差万別だと思うし、むしろそれが自然だと思う。

日本全土を覆ったコロナ禍の中で迎える10年、ややもすれば忘れられるのが怖い気持ちもあった。

「震災の時はね、まだみんなで分かち合おうという気持ちがあった。でも、今回のコロナ禍は違う。限られたパイを奪い合うような話(マスクの買い占めなど)を聞くことが増え、とても残念に思う」

被災地でタクシー運転手をされている方の言葉だ。我々はこの10年で何を学んだのかと思った。

そして今年2月13日深夜に発生した地震。最大震度は6を超えた。不安な中で安否の確認などに追われるなかで、かつ

て「木陰の物語」届けるプロジェクトの編集に協力させていただいた時、訪問させていただいた障害者作業所の所長さんのコメントが新聞の紙面に掲載されていた。障害を持つ方々が災害弱者とならないよう、この10年の間にこつこつと取り組まれてきたことが記されていた。

コロナも自然災害も怖い。ただ闇雲に怖がるだけではなく、できることをこつこつと積み上げていくしかないという気持ちを再確認させられた。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という 観点から考える P192~

黒田 長宏

新型コロナでとばっちりを受けてばかりだ。現在のところ、一応私は病院スタッフをさせてもらっているの、マスクは一般の方々よりは元々つけていたし、手指消毒も慣れていると思うが、とうとうフェイスシールドまで付ける日々になってしまった。思えば、ボクサー辰吉丈一郎氏は心肺機能を高めるため年中マスクをして生活していたのに、これでは優位性が無くなってしまったし、新型コロナが認知されたかなり早い時期から発明家ドクター中松氏が某SNSにフェイスシールドをタクシーの中で付けて移動している写真をアップしたのを拝見して私は、やはり変わった人なんだなあと思いながら写真を見たのにも関わらず、もはやフェイスシールドは普通どころか大事なアイテムと化してしまった。やはりドクター中松氏はすごい人なのかも知れないと思われた。

<https://konnankyuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚 P176~

山下桂永子

昨年の今頃は学校の臨時休業が決まったばかりで、この執筆者短信にもそのことを書いていました。読み返してみるとただただ不安におののいているなということと、教育分野で心理士ができることは何かという、前回から書き始めたこのテーマについての問いを立てていたようです。確かに



この十数年やってきたことに対して、問いを立てて検証していくような1年になったようにも思います。そのことをこの対人援助学マガジンで書いていたらと思います。

のはずが。今回は打って

変わってお金のお話です。いや、そんなつもりはなかったのですが、書き終わってみると「めっちゃめっちゃお金の話になってるやん」と今更ちょっと恥ずかしくなっています。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために P160~

尾上明代

とても美味しい無糖のピーナッツバターが手に入ったので、クッキーを焼く予定です。ピーナッツバターを買ったところから教えてもらったレシピをご紹介します。お菓子を作ることは滅多にないので、すごく楽しみです！

ピーナッツバター(常温): 80g

砂糖: 70g

はちみつ 20g

卵黄: 1個分

小麦粉: 100g

きな粉: 50g

ベーキングパウダー: 小さじ 1/4

1) 常温に戻し、よくかき混ぜておいたピーナッツバターに砂糖を加え、よく混ぜる。

2) 卵黄を加えよく混ぜたら、小麦粉・きな粉・ベーキングパウダーを加え木べらなどでさっくり混ぜる。

3) 生地をまとめ、ラップなどで包み、冷蔵庫で1時間ほど休ませる。

4) クッキングシートを敷いた天板に、生地をお好みの大きさに丸め、5ミリくらいに伸ばす。

5) 170度に温めていたオーブンで12分焼いたら出来上がり！！

松村奈奈子

まだまだコロナコロナの日々。
昨年末の事、いつも行く中華料理屋さんで、店長から突然「助けて下さい！売り上げが去年の3割しかないんです」と頭を下げられました。「まじっ」と旦那と思わず目を合わせて、ダイレクトなお願いに少々びっくりしました。いや～、中華大好きだし、ここの「焼き豚」が夫婦でお気に入りなんです。それからというもの、我が家の食卓にテイクアウトの「焼き豚」が頻りに登場しています。いや～、様々な業界へのコロナの影響、ほんまにどうしたらいいもんやら。

精神科医の思うこと

P143~

鶴野祐介

長いようでもあり、あつという間のようにもあるこの1年でしたが、1年前には聞いたこともなかった ZOOM をなんとか使いこなせるようになったのは確かな収穫でした。

うたとかたりの対人援助学

P172~

柳 たかを

DIY ファイアーピット



奈良の家の敷地の周囲や庭に植えられた植栽や木々の剪定をサボると見栄えも悪いし、葉が茂りすぎて風通しや陽の光がさえぎられ木が病気にかかりやすくなります。私が建てた家ではなくて妻の実家ですが、土地が間口が約 18 メートル、奥

行きが約 25 メートルと個人の住宅地としては広い。これらの木々の維持管理は私の仕事だと思い、インターネットなどの情報を頼りに頑張りすぎないをモットーに剪定しています。

驚くのは木々の成長の早さ、5 年前の写真では大人の背丈より少し高い程度だった針葉樹カイヅカイブキが今や 5~6m に。それ以上に成長した桑の木は途中から 7 本に幹分かれて横に伸び広がり、2 本の枝がまもなく隣の JR の線路に届きそうになっていました。

そこで桑の木をメインに伸びすぎた枝を切り落とすことにしました。数日かかってカイヅカイブキの切り枝もあわせると軽トラックの荷台 4~5 杯分にもなった。さてこの少なくない量の木の枝の処分に困りました。

市の焼却場に持ち込みましたが、数日にわたり何度か通ううちに顔を覚えられて、「あと何台分あるの？」(エッ?!…ただの剪定屑だけど…問題があるのかなあ…ふーん)、まあここでこの職員の事情聴取を受けるのも面倒かも…「あーこれで終わりです！」

それ以来、市のゴミ焼却場に持ち込むだけでなく、家の敷地内で少しずつ剪定屑の焼却処分できる設備を作ろうと思いました。ドラム缶を加工した焼却炉も考えましたが、敷地に余裕があるのでキャンプ場の焚き火やバーベキューが楽しめるファイアーピットを作れないかと思い、炉の周りをセメントと赤レンガで囲み、焚き火をしてない時でも見て飽きないものと考えました。まだ完成ではありませんが試行錯誤の末、出来たのが写真のものです。



何度か廃材や剪定クズを燃やしまし

た。その熾火で焼き芋を焼き、懐かしい昭和気分を味わっています。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ

P152~

小林茂

北海道は2月も末となり、少しずつ日差しにも変化を感じさせるようになった。それでも、積雪となるような雪がドサッと降り積もったり、風が冷たく凍えるような日もある。早く雪が降らないような春らしい季節が来ないかと思わされる。

最近の話題といえば、勤務する大学学部の新札幌移転を来年に控え、これまた勤務する幼稚園の移転と同居している協会の移転が同じような時期に待ち構えている。そのための会議や打ち合わせ、身辺整理と、実際の引越以前に気持ちと頭がせわしくなっている。あまり多くのことを抱え込まないことが望ましいが、どうしたものか。できることの限界を思い、自制が必要に思うこの頃です。

対人支援 点描

P141~

中島弘美

CONカウンセリングオフィス中島でおこなっている面接は約90分、対面にてのカウンセリングです。二度目の緊急事態宣言以降は、それぞれの方の事情等により面接スタイルを決めました。すると、オンライン面接を希望される方はそれほど多くありませんでした。オンラインで安心してやりとりをするためには、ハードルがありました。

まず、コミュニケーションツールのタブレットやパソコンなどの操作に慣れているかどうか、です。そして、自宅で周囲を気にせず話ができる環境を準備できるかどうか、です。生活をしている家のなかは、自分以外の家族のだれかがいるので落ち着かない、そのことがなによりも高い壁のようでした。

一方、オンラインを希望された方の最大のメリットは、移動時間を省けることでした。家から離れる時間を確保するのがむずかしい事情の方は、オンラインを利用するとこれまでかかっていた往復の時間と体力的な負担がないことがとてもたすかるとのことでした。

毎回、貴重な時間を費やしてカウンセリングに通っておられることもわかり、相談に来られている方の生活状況や環境、家族理解を改めてしているところです。

カウンセリングのお作法

P39～

団遊

刑務所から出所した人たちの社会定着支援を行う「定着支援センター」の支援員さんに向けた研修講師をしました。もちろん Zoom です。午前と午後で、あわせて5時間ほど。参加者同士のワークや発表もたくさん採り入れたその中で、理解者と協力者の間には、大きな谷があるのだなあと改めて感じました。

理解はしてくれる、賛同もしてくれる、でも、具体的な協力には至らない。「それとこれとは話が違う」。これはどの世界にも当たり前にあることで、もし理解者の多くが協力者になるのであれば、世界から飢餓レベルの貧困はすでになくなっているでしょう。

具体的な協力が難しい理由は、拒む側からいくらかでも出てきます。その多くが、相応に正当性があるものばかり。でもそこで「聞いていただけただけで感謝です、ありがとうございました」と言ってしまうと、ほとんど進展はありません。その谷をどう超えるか。鍵のひとつは、いくつもの協力方法を用意しておくことだと思います。「松竹梅を用意すると竹がよく出る」のは飲食店などでよく知られた話。例えば寄付を募る団体なんか、具体的な金額の案内の最後に「せめていいね！ボタンだけでも押してください。1クリックで2円の支援になります」なんて案内しているのは、上手なパリエーションの作り方です。理解してもらうのはそう難しくない、しかし協力者を募るのは相応の創意工夫が必要だ、そんなことをみんなでシェアしながら、具体的な作戦を考える会になりました。(団遊)

人を育てる会社の社長が、 今考えていること

P36～

村本邦子

大阪はまたもや緊急事態宣言で、どこへも行けなくなった。花もないし、寒すぎて、散歩する意欲もなくなり、下手すると3～4日家から出ないということもあった。仕事ははかどるし、料理や編み物や映画も楽しめるし、いいと言えいいのだが、無性にどこかに行きたくなる。一ヶ所にじっと張り付いた生活は、やっぱり自分に合わない。Facebook を見ていると、私と同じようなタイプの人が他にもいることが見て取れて、密かに笑っている。2月に入り、菜の花や水仙や梅が咲き始め、ちょっと外に出てみようかなという気持ちに戻ってきた。車でイチゴ直売所巡りをして、毎日おいしい苺を食べている。少しずつ春に向かっていく感じが嬉しいな。4月になれば、対面授業も戻ってくる。少しずつ新しい日常へと移行していくことだろう。

周辺からの記憶 一東日本大震災

家族応援プロジェクト(22)

P123～

國友万裕

今、本当にイライラしています。実はもうすぐ新たな単著が出る予定です。すでに校正は終わっていて、あとは印刷だけです。本当のことを言えば、誕生日に合わせて出版したかったのですが、それは無理だと言われ、3月になりそうです。

今更、出ないということはないとわかっているんだけど、やはり心配です。ここまで来てなんかのトラブルが起きて出なかったらと最悪のシナリオを想定して悩んでいます。昔からこういう性格なんですよねー(笑)。

本のタイトルは『マスキュリニティで読む21世紀アメリカ映画』(英宝社)です。友人にこのタイトルを言うと、大抵の人から「マスキュリニティって何?」と言われます。知識人であっても、この言葉を知らないんですね。マスキュリニティとは「男性性・男らしさ」の意味。とりわけ最近「トクシク・マスキュリニティ(有害な男らしさ)」という言葉がアメリカではあちこちで使われています。これからは、この言葉を社会に浸透させなくてはなりません。この本が少しでもそれを担ってくれればと思っています。



男は痛い!

P92～

古川秀明

講演会&ライブができないので、このシリーズは前回から断念しています。今回は団先生の zoom 講演会の感想を書かせて頂きました。とても勉強になりました。

講演会&ライブな日々

P111～

西川友理

京都西山短期大学で保育者養成をしています。

ここ数か月、全く関係ない別々の場所で「クソバイス」ということばに3回も出会いました。なんとなく感覚的にわかる、この言葉のニュアンス。気になる言葉だなあと思い、調べてみました。

どうやら2015年にエッセイストの犬山紙子さんが『言ってはいけないクソバイス』という本を出したのが発端の様です。「大きなお世話&余計なひと言アドバイス。実はそれ、相手を思いやっているように見えて、上から目線の論を押し付けているだけ、しかも言った本人はとても気持ちがイイ」ああ、わかる！それされるとめっちゃ嫌、にもかかわらず多分私もしたことあるある！！

誰かの相談にのる、だれかの問題解決を目指す、といったことの意味やあり方を考え直そうよ、問題をなくそうとするのではなく、問題に付き合うという方法もあるんじゃないかな…という動きが、社会福祉分野以外でも生まれているのかなあと思います。そういえば、伴走型支援という言葉も随分メジャーになりました。

今、『言ってはいけないクソバイス』は改題されて文庫本で出ているらしいです。その名も『アドバイスかと思ったら呪いだった』

た』…うーん。もうこのタイトルだけでまざまざと蘇ってくる感覚があります。あるあるです。

福祉系対人援助職養成の現場から p66～

坂口伊都

マガジンの原稿の個人情報について言われてモヤモヤした気分になりました。ここで、少し私の想いを紹介させていただきます。

まず、里子に不利益が起きないようにということはいつも考え、言葉をどう選ぶか、何度も読み返しながらかいてきました。どの回でも性別すら特定されないように描き、里親である私自身の心情が原稿の中心になっています。実際に体験することで、私の中で感じていること、起きていることを感情的ではなく、客観的に書くようにしています。そして、里子本人がこの原稿を読むかも知れないということを気にかけました。

これから先、里子は児童福祉法の範疇でなくなる年齢になっていきます。記録として残ることの意味はあるだろうと思っています。里子自身が、その時はうるさいなと思っていても、実は気にかけてもらっていて、応援している人々が周りにいることを少しでも感じてもらえればと願っています。

何を大事にし、どれぐらいの努力をして形にしているか想像することもなく投げられる言葉を耳にすると、子どもが生きていくことへの支えを大人はどう作っていけるのかを本当に考えているのか聞かせて欲しくなります。

家族と家族幻想 P118～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

【いつになったら】東日本大震災から間もなく10年というところで、再び大きな地震があった。二度目の大きな地震に、現地の人々は本当に怖い思いをされただろう。北海道でも揺れがあった。この地震が、東日本大震災の余震だという。この10年の間にちよくちよく余震はあったが、ここまで大きいものが来るとは…。いつまで

も心休まることがない。

東日本大震災後の支援で入った時、あの大きな大きながれきの山、山元町の駅から見た土台のみの街並み、あちこちに放置された車、そうした景色に圧倒された。今も心に焼き付いている。避難所で、あの時お話しした方たちは今どうされているだろう？お名前も知らない。お元気でいらっしゃることを祈るだけ。十年ひと昔と言うが、10年経っても「昔」にはならない。同様に胆振東部地震の支援でも、人々の心に深く残る震災の不安。日本の何処かでちよくちよく起きている地震。日本人は地震と共に生きるしかない。地震の隙間で、今を、平穏な時間を大切に楽しむしかないのだろう。

ああ、相談業務 P71～ 先人の知恵から P167～

岡崎正明

年末に我が家に来たニンテンドースイッチ。今さらながら家族みんなでハマっているのが「あつまれどうぶつの森」いわゆる「アツモリ」というやつである。

子どもらはモチロンだが普段はゲームなどしない相方も、珍しく空いた時間を見つけてやっている。「夜10時には店が閉まるから！」と急いで子どもを寝かしつけたりと、中々の熱中ぶりだ。知らない人のために言えばこのゲーム、特に目標が明確でないというか、多様な過ごし方がアリというのが大きな特徴だろう。大魔王を倒すとか、高得点を出してクリアするとか、よくあるゲームの定番ゴールはなく、釣りをしたり、花を育てたり、部屋を好みに作り替えたり、オシャレな服を集めたり…。思いの通りの過ごし方が目指せる。ゲームの世界も私が子どもの頃より大きく広がったものだと思う。



手塚治虫が子どもの頃は「マンガ」というと子供だましのもの、いい大人が読むなんて恥ずかしい！とされていたそうだが、それを手塚はじめ、たくさんの先駆者たちが質の高い作品を作り、今や日本の文化として海外にも胸を張って発信するものになった。

私たちがゲームに抱くイメージや感情も不変ではなく、時代とともに変化するのだろう。コロナ後の児童福祉の現場では、ゲーム依存とかゲームの悪影響を聞くことが増えた印象だが、一括りに「悪」とするのではなく、どうしたら弊害を減らし、ゲームがあっても本人も周囲も幸せに近づけるのか。そこを模索していかないといけないのだろうと思う。

役場の対人援助論 P99～

大谷多加志

今号から自分の連載に加えて、不定期連載で「マガジン執筆者訪問記」を書いていくことにしました。前号の短信に“執筆者を訪ねたい”と決意を記してから、比較的短期間で実現するという、私としては珍しい展開でした。普段なら帰省などの予定が入る年末年始、コロナの影響でそれらの予定が吹き飛んだことが、実現できた一つの要因だと思います。これまで当たり前に行っていた行動を変えてみる。コロナが与えてくれた功罪の「功」のひとつかもしれません。

訪問記を書いてみて、執筆者の方にお会いしたいという思いは、さらに高まったように思います。今は第2弾に向けて準備をしています。コロナが収束したら遠方の執筆者の方のところへも足を運んでみたいなあ…と勝手に楽しみにしています。

発達検査と対人援助学 P107～ マガジン執筆者訪問記(1) P5～

馬渡徳子

二歳の孫の口癖が、「まっ、いいか」である。察するに、娘夫婦の口癖だ。

この言葉に、緊急性や重要性の大小は異なれど、局面が硬直した際、すっかりと頭が固くなった私たち夫婦は、随分と救われる。

先日、孫たちは、冬休みに YouTube を観た後、お年玉を使って、クレーンゲームに行く約束をしていたらしい。だが、記録的な豪雪のために行くことが叶わないという事態になった。

その翌週、雪が少し収まり習い事が再開、その送迎の際スーパーに寄っていると、幼児向けの付録付きの雑誌に「クレーンゲームの工作」が載っていたのを、二歳の孫が見つけてしまった。やれやれ、チャイルドカートの目線にうまく合わせて、商品が陳列されているのだなあと感心するばかり。(笑)

二歳の孫「ねえね! これで、『まっ、いいか』と幼児向け雑誌を指し示して、ねえね(7歳の孫)に働きかける。

ねえね「いいもの見つけたね。これ、行きたかったんだよね。でも、雪で我慢したんだよね。一緒に遊びたいね。」と、応えた。二人分のおねだり熱視線が、じいじ&ばあばに一齐にビーム!

じいじ「自分らで作れるんか? 途中で投げ出すの、なしやぞ。じいじとばあばは、老眼でできんぞ。」

ばあば心の言葉「あれま、買うんかいな。子どもたちの時には、『してやりたくても、しない。本と部活以外のものは、買うのをちょっと待たせる』んじやあなかつたっけ? 孫は別格か。まあ、作るの面白そうやけど」

ねえね「大丈夫。数字の順番に作れば、いいじ。もしも、できなったら、じいちゃん、理系やから、頼む。」

<文系>じいじ・ばあば、<理系>パパ・じいちゃん、<芸術系>ママ・ばあちゃん、おばちゃん・おじちゃん。
孫たちの区分は、上記らしい。

ばあば心の言葉「いや、どちらかというと、芸術系に頼んだ方が…」

「まっ、いいか」

結局、夕飯も風呂も、そこそこに、約二時間かけて、セロテープや割り箸で、修正・補強されたクレーンゲームが出来上がり、孫二人は、そのままお泊りして、翌日土曜日は、遊び倒した。

満足そうな孫たちを観ていると「甘やかして」と娘夫婦に怒られそうだが「まっ、いいか」と返してみせよう。

「昔懐かしい光景」を思い出した。

子どもの頃、「サンダーバード」というテレ

ビ番組があり、そこで観た光景は、移動式電話、テレビ電話等は、現実社会に実現しているの、驚きだ。とりわけ男子は、そのプラモデルに夢中だった。当時にも、子ども向けの雑誌付録に、紙で作る付録があった。高価な可動式の基地付きのプラモデルを持っている友人もいた。が、実家は、そう簡単におもちゃを買ってもらえなかった。私は弟と、蒲鉾の板や、つまようじ、アイスクリームの棒や、プチプチ(気泡緩衝材)、牛乳瓶の蓋、綿や石ころに絵具を塗って、夏休みに「基地」を作った。そして、その基地は、夏休みの工作コンテストで、表彰された。実家の母に電話をして、「あの基地が賞状、まだある?」と問うてみた。

母「床上浸水の時と、お父さんが亡くなった時に、全部捨てたがいね。あんたあ、覚えとらんのか? あんたも、やっぱり還暦やねえ…(笑)」

馬渡の眼
P146~

団士郎

Zoom で連続 6 回の講座 が 2021 年 1 月から始まった。平日の夜 20 時:30 分から 22 時までの 90 分。季刊「かぞくのじかん」誌の読者を中心に、定員超えの 50 人あまりの方に有料受講して貰っている。

通常、援助職の人達に話すことが多いので、ここは少し趣を変えているつもりだが、大して変わらないと思う人もあるかもしれない。

もう一つの zoom 講演も 2 月 13 日、第 3 回目を迎えた。こちらは 20 年ほど前、京都で開催していたトークライブの 2021 年版だ。何を話すかはギリギリまで思案して決める。だから参加申し込みをして下さる方は、何の話をするのか分からないまま参加費を払うことになる。こちらも今のところ毎回定員の 100 人を超えて締め切った。私流の話芸として楽しんでもらいたい思いがあるので、工夫をしていると楽しい。

Zoom なる発信手段が登場して、新たな可能性が展開されていく感じた。コロナによる変化も悪いことばかりではない。用心しながら、コロナ禍の世界も満喫していきたい。

ホームページでコラムの連載も開始し

ていて、ウイークリーで 20 回を超えた。800 字くらいと決めているが、時々長い。ぜひ、ご覧下さい。各地の WS など、いろんなインフォメーションもあります。

更に、3 月上旬には新刊「わが子が小学校に上がる前に読みたい木陰の物語」が発行された。既刊本とは違った本の作り方になっているので、お楽しみ下さい。



Family history (3)
P52~

鶴谷 主一

僕の新しい仕事に動画編集が加わりました。保護者の来園が制限される中、動画で子どもたちの様子を伝えるという使命から始まったのです。ビデオカメラや iPhone で撮影した動画をパソコンに取り込んで、場面切り替えやズーム、クローズアップしたい場面をスローで編集したりテキストを入れたり…いま 3ヶ月間無料で使える「ファイナルカットプロ」というソフトを使っていますが、3ヶ月後に買うことになるんだらうなあ〜と思いつつ、使い方を YouTube で検索しながら作業しています。YouTube って皆さんがごぞって教えてくれるので助かりますねー!

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から
P62~

水野スウ

この冬は数年ぶりの大雪で、1 月は雪

かきに明け暮れました。その分、季節の巡りが待ち遠しい。昨年 92 歳で亡くなった、大好きな紅茶仲間さんが大切に世話してきたクリスマスローズのひと鉢、お連れ合いから引き継いでわが家に来ています、鉢の中からうっすらピンクのつぼみが頭を持ち上げて春を知らせてくれています。

写真は、ヒマラヤスギの足元にたくさん落ちていた cedar rose(ヒマラヤスギのバラ)。下の部分は次々タネを飛ばしてはがれおちて、最後に残るのが先つちよのバラ。その横にあるのは、ダイオウマツの松ぼっくりをリスがかじったあと。今回の原稿にも登場する、通称エビフライ。どちらも冬の置き土産ですね。

今号は、珠洲のお宿でしたワークショップのことを。これまでも何度か同じプログラムでしたことのあるワークですが、お宿の場の持つ力と、このお宿家族が紡いできた人と人の関わり方の力で、まさに一瞬一会のワークになりました。私自身、この時間を長く記憶しておきたくて、マガジンに文字記録として残します。

きもちは言葉をさがしている P82~

山口洋典

COVID-19 の 19 は 2019 年のことを指すということ、時折忘れそうになることがあります。コロナ禍と呼ばれるようになって 1 年が経ち、1 年前には想像だにできなかった仕事と暮らしを送ってきました。とりわけ、これだけ列車や飛行機に乗らない年はなかったように思います。特に、この 10 年は少なくとも月 1 回は東北に足を運ぶようにしてきたこともあって、です。

そうした中、東日本大震災から 10 年を迎えます。遠く、関西から思いを寄せていた者でさえ、あの日のこと、あるいはあの日からの日々のことを色濃く思い出すことができるのですから、現地の方々にとってはなおのこと、胸騒ぎするところがあるのではないのでしょうか。細くとも長く、つながりと関わりを大事にしていきたい、という思いからいくつかの活動を展開してきましたが、その一つに、当時は京都を拠点としていた NPO 法人アート NPO リンクによる「アート NPO エイド」というものがあり、その一環で山元町役場(宮城県亶理郡)に

て 2011 年 4 月 23 日に藤井光さんによって撮影・投稿された岩見夏希さん(仙台市立立木通小学校 5 年)の『ない』という詩の写真が、今でも脳裏に焼き付いています。既にアート NPO エイドは活動を終了してしまっただけ、喪われたいのちと残されたいのち、それぞれの尊さを改めて大切にしていこうと決意として、インターネットアーカイブに保存されていた URL

(<https://web.archive.org/web/2019102101426/http://anpoap.org/?p=716>)にある写真を紹介させていただきます。



PBLの風と土 P178~

見野 大介

気づけばもう今年も4分の1が過ぎました。今年は大きな変化が生まれる可能性が出てきたので、その変化に対応しつつも仕事のペースは落とさないよう、ひたすら頑張りたいですね。

ハチドリノ器 P4

脇野 千恵

コロナ、コロナと言われて、早いもので 1 年が過ぎました。今年の始まりから、仕事と研究や実践に追われる毎日、コロナに罹っている場合にはありません。ワクチン接種を優先的に受けられる身ですが、私なりの対策を打って待つことにしようと思っています。

さて昨年は、家族の一人に難病であることがわかり、コロナと二重の困難に闘う 1 年でした。幸い日本でも数少ない治療法によって、命にかかわることはないだろうとお墨付きをもらいましたが、コロナ禍での医療関係の人たちの懸命な治療に、感謝しかありません。まさかと思っていることが、我が家にも起きることがある。家族のことを長く勉強していますが、色々な事例から学んできたことが活かされました。慌てず冷静に受けとめ自分なりに理解す

ることができたことです。長く生きていくと色々なことがあるなと思うこの頃です。

こころ日記「ぼちぼち」part II P229~

竹中 尚文

坊さんがお経のあとのんびり坐っている、というイメージを私は大切にしたいと思っている。ヒマそうな顔をして坐るのである。例年のことだが、1 月と 2 月は忙しい。お参りの約束がいっぱいで、お参りのお宅を一步出るとバタバタと走る。例年、2 月頃に息切れをして風邪をひいて寝込むことになる。今年は、コロナもあって気をつけたからかも知れないが、2 月 20 日を過ぎても風邪をひかなかった。と思ったら風邪をひいた。風邪をひいたら、お葬式ができて這々の体で出掛けた。イメージづくりもあったものではない。不覚であった。

路上生活者の個人史 P89~

中村正

大学人としては定年準備期である。4 年後の今頃は研究室の片付けをしている予定だ。さらにその後も生き続けるだろうから、まったく社会から撤退することはない。その後の動きをどうするのかの準備期でもある。

立命館大学には法学部に入学した学生時代からいることになるので長い。1977 年入学だからもう 45 年程になる。大学院生、教員として過ごしてきた。長過ぎだろう。といっても内的には一貫しているものがあると思っているので外形的なものが変わるだけで、突然中身が充実するわけでも逆に穴が空くわけでもないし、学生や院生は目の前にいるし、仕事も山のように存在している。

ただ、この 4 月より「研究専念教員」となる。2 年間は研究や研究指導中心で過ごすことができる。コロナ禍でなければ海外に出かける予定だった。これまで長期の在外研究の機会を利用して、サンフランシスコ、シドニーと滞在してきた。S のつく大都市は憧れの街が多いと海外駐在の方々はいふ。残念ながらコロナ禍で三つ目の S のつく大学都市にはでかけることができなくなった。せめて 2 年間のうちに

海外調査ができるほどにはコロナ禍がおさまって欲しいものだ。

臨床社会学の方法

P26～

中條 興子

ご無沙汰しています。もうすぐコロナ禍になり一年が経とうとしています。今も感染防止のためにマスクを装着することはお互いの命のために大切です。マスク文化のなかでの音声会話は、盲ろう者として生きる当事者として不自由な状況が続いています。

このたび、きっかけがあり、音声会話をする機会が増えています。

その事について前号時に書こうと思ったのですが、整理ができず、お休みをさせていただきます。正直、今もまだ整理ができていないので、整理を待っていたら一生書けない気がしてきました。

今号は、なんとか言語化できるものは言語化をして、書いてみようと思いました。支離滅裂なところも多いと思いますので、読みづらいと思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

「盲ろう者」として自分らしく生きる

p225～

寺田 弘志

書類作製も、対人援助の技術としては重要なものだと思います。

必要な書類であれば、できるだけ患者さんの利益になるよう、懇切丁寧に書かせていただいています。

しかしながら最近なんちゃら機構から届いたある患者さんに関する調査書は、A4で8ページ、質問項目が山盛りでした。しかも解答欄が小さすぎるので、書式をワードで作直して入力しました。

新型コロナの感染防止対策の徹底で時間に余裕がない中、回答書を作るのに10日以上費やしました。

文字カウンターで見たら、12000字。400字詰め原稿用紙にすると30枚分です。30枚というと大したことないかなと思いましたが、今回の本文の記事は文字カウンターで4000字。およそその3倍なので、やっぱ私にしたら大したことありません。

接骨院に心理学を入れてみた

P184～

浦田 雅夫

1年のなんと早いことか。コロナで突如の学校閉鎖。あれから、もう1年。遠隔授業や蜜を避けた対面授業、学生も教員も慣れないことによく頑張った1年でした。はやく安心した日常を取り戻したいものです。

社会的養護の新展開

P60～

中村 周平

前回、ようやくタイトルに沿った内容をお届けできたのですが、今回私の不手際で原稿を完成させることができませんでした。誠に申し訳ありません。今回は皆様に喜んでいただける内容をお送りできればと思います。近況報告としては、世間でも頻繁に話題に上る、ワクチンについていろいろと考える日々を送っています。自身の状況から、一日でも早く接種した方がよいと思う反面、将来的な副作用についても不安を感じています。また、打たないという選択肢が許されない社会の雰囲気にも脅威を感じつつ、どこかで折り合いをつけなければならないなと思っております。

ノーサイド

休載

千葉晃央

人は所詮、ドーナツ状の生き物と、どこかで聞いた。真ん中の穴に何かを入れ込み、養分を吸い取って生きている。体の内側も実は外側の皮膚と同じ。つまり体の内側も外側なのだ。父の死去以降、特に体を大切にしてきたつもりだったが、「自分だけは大丈夫！」はあるはずもなかった。

突然の体調不良で体内のあちこちから内視鏡。ポリープを見つけ次第、切除ということになった。食事制限をしてきれいに体内をみてもらう「何とか液」。これか！私が廃プラリサイクル施設でよくコンベア上に流れてきた、「それ」である！こういう出会い方をするのが、リサイクル職場あるある。廃棄されたものをみて、後から知っていくパターン。とうとうそのユーザーに私もなったのだ(たくさんのプラゴミのなかでよく見ていたものは、自分もユーザーになっ

ていくのも当たり前か……)。

自身の体内映像も見ることになったが映画「ミクロの決死圏」で途中から記憶がない。発見！切除！で食事制限、経過観察を経て今である。1年後、経過をみるために来てね！といわれた。コロナ禍での医療現場での様々な配慮にも触れて、感謝しなかった。

こうした書き物をしているときは、口を動かすと、また集中が継続できる時が多かった。ガム依存だったが、胃腸につらくなってきていた。皆さんはどう工夫をしているのだろうか？そもそも、そんなことをしなくても皆さんは集中できるのか……。体を動かすのが好きな自覚はあるので、それに基づく職業選択をしてきたことを考えると自分を信頼できる。これから体の変化は当然で、その変化にどう合わせていこうか。そんなことになってきた数年だった。

あらためて体内も外側の皮膚と基本同じ！皮膚に長くくっつけておくことを前提に養分接種をしたい。皮膚接触をコントロールし、ドーナツ状の生き物としてよりよく生きよう。



家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P22～